紺屋及び職人を取り巻く今日的課題

稲　葉　昌　代

1、はじめに

若い頃から染織関係に興味を持ってきた筆者であるが、最近特に染色分野における伝統的な手染めによる製品がなくなってきていることや、確かにここに紺屋があったはずだったがと、町の通りすがりに思うことがあった。いったい現在紺屋を取り巻く状況はどのようになっているのだろうか、実態はどんなだろうか、ずっと気になっていたのははたして私だけだろうか。

ここに、昭和36年静岡で採取された大黒様（手毬歌）の唄がある。

大黒様という人は
一に俵ふんまえて　　二ににっこり笑って
三に酒を造って、　　四つ世の中よいように
五ついつでもニコニコ　六つ無病息災に
七つ何事無いように　　八つ屋敷を広めて
九つ紺屋をおっ建てて　十で到頭福の神

（資料１　町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』P24）

この歌詞から、紺屋を建てるということは、その家にとって大きな幸せをもたらせる意味を持っていたことが理解できる。江戸時代にはこの大黒様の歌は多くの地方でも歌われていたようであるが、職人の全盛期であったと言われる江戸時代は、紺屋も全盛を極めていたことが遠藤元男著『日本職人史』（全６巻）で把握できる。

藍を染めるには、人間国宝になられた「千葉あやの」が原初的な方法で今日まで染め続けてきたように、藍の栽培・藍建て（染料づくり）・藍染めの三工程で行われていた。13世紀には染物のうち藍染めを専門とする専業化が始まり、14世紀には茜染や紅染といった染物職人も生まれていた。専業化してきた紺屋は、藍の栽培は主として農民がやっていた。秋田県横手市の実家が紺屋であった寺田伝一郎氏の随筆『雪国小記』には、明治の初等にも寺田家で実際に行われていた様子が詳細に記されている。紺屋の藍甕は、16世紀までは地上に置かれ、染料の藍が底に沈まないよう掻き回して染めたため、紺屋のことを「紺掻」（こんがき）とも言い、町や村で居職経営がされていた。

第100図　江戸の紺屋（江戸惣鹿子名所大全）

資料２　江戸の紺屋の様子

『近世職人の世界』P368より

紺屋の仕事は家族労働によることが必要であり、資料 2 で見られるように、女性が主体となることが多かったようである。紺屋は他の染色や洗い張り・湯のし等もしたので、上方では「悉皆屋」と言われていた。現在の静岡においてはほとんど死語となってしまった言葉であるが、業界の中では未だに使われているようである。17 世紀になると染料の処理や染め方の違いによって、紅師や紫師、茶染師といった職人も現れた。紺屋でも分業が進み、染料の蘂（すくも）や藍玉造りは藍師・藍屋の仕事になり、紺屋は染めるだけの作業になった。17 世紀からは土中に埋めたり囲いを造ったりしていくつかの甕が置かれ、藍の醗酵を促すための加湿設備もみられるようになった。甕の数は経営規模を示すものであったようで、資料 2 からも確認できるように多くは 2 個並べて置かれていたようである。藍甕の大きさは、七斗～二石入りまでいろいろあった。

江戸時代の職人は“宵越しの金は持たない”と言われるほどに、その日の金を使ってしまっても、腕さえあれば明日は明日の風が吹くさ！というような気風をもった、腕 1 本で生活できる仕事に事欠かない時代でもあった。前述『日本職人史』遠藤元男の研究からしても決して手間賃が高かったわけではないが、道具を大切にし絶えず新しい造形への意欲をもやし、“細工は粒々、仕上げを御覧じ”というのが職人気質の基調であったようである。

日本にはこのように職人が栄華を極めていた時代があった。

さて、筆者は、若いころから染色活動をしていた関係からから、多くの染め人とかかわることができた。

大きく分けると染色工芸家として芸術活動をし、一品作品の中に私達に潤いや生きるエネルギーを与えてくれる人達、そしてまた日常生活での必需品を染め、私達の生活にとけこんだ染色活動をしてきた人達である。

今回はその中の後者にあたる人達、

⑴　人間国宝「芹沢銈介」が出入りしていた『法被紺屋』塩沢勝利氏
⑵　芹沢銈介と同時代に紺屋を営んでいた増田邦太郎氏と、その娘婿増田猪富氏の二代に亘って仕えた染め職人斉藤博司氏
⑶　4 代目『紺虎』を継ぐことなくサラリーマンになられた鷲巣昭弘氏
⑷　由比正雪の生家と知られる江戸時代からの紺屋を継ぐ『正雪紺屋』吉岡統一郎氏
⑸　人間国宝「千葉あやの」の仕事を受け継ぐ千葉まつえ様
⑹　日本経済新聞企画「200 年企業」に掲載された愛媛県『地細工紺屋』若松智氏

に直接おめにかかってお話を伺い、紺屋および染め職人を取り巻く今日的課題を探っていきたい。

2．今日に生きる紺屋及び染め職人の実態

⑴「法被紺屋」塩澤勝利氏　（静岡市駿河区敷地在住）昭和 16 年生

塩澤家は、静岡が生んだ人間国宝「芹沢銈介」が染色の手ほどきを受けた紺屋である。大正 3 年親戚の保証人となったためにすべてを失った芹沢銈介が、昭和 5 年染色家として静岡市三番町で独立した時、職人として働いてくれたのは塩澤勝次郎（明治 25 年生 勝利氏の叔父）であった。そしてその後東京蒲田に移転した時には、その勝次郎の弟である虎之助（明治 37 年生）が一緒であった。

浄土開宗八百年慶讃御忌尊師記念の式典には、現当主勝利氏と母親の春子様が民芸の人達と一緒に参列された。その折、芹沢銈介が勝利氏に「おじいさん（弥太郎）のおかげでここまできた」と話されたと言う。知恩院に装飾布をはじめ、袈裟を奉納した芹沢銈介は、人生に大きな道を開いて下さった柳宗悦の法要を済ませた時、改めて自分の人生をかえりみて、そこに塩澤家の当時の当主であった塩澤弥太郎があったのであろう。しかしそれは弥太郎個人だけでなく塩澤家一族の事であった。塩澤家なくして人間国宝「芹沢銈介」は生まれなかったと言っても過言ではない。

塩澤家には弥太郎の子どもは 15 人いたという証言もあったが、その一人誠蔵（勝利氏の叔父）の養女である陽子の謄本が見つかった事により、12 人であった事が判った。その塩澤家の男兄弟のほとんどが染職人として自分の家で技を磨き、どの兄弟も腕が良かったようで、芹沢銈介は、当時静岡市末広町にあった塩澤家の仕事場に足繁く出入りするようになるのであった。

塩澤家は、芹沢銈介が結婚した当時住んでいた家の、安西 1 丁目の通りを隔てた向かいにあった。塩澤家の長男であった弥太郎に惚れこんで結婚した“すず”は、芹沢銈介の妻“たよ”とは親戚で、一人っ子で育った“たよ”とは姉妹のように親しかった。従って芹沢銈介が塩澤家に出入りしたのは、極めて自然の成り行きだった。

塩澤家は、すでに『明治初期静岡町割絵図集成』に記載されている老舗の紺屋である。大正時代までは塩澤家の仕事場は安西の奥行きの深い敷地の中程にあって、藍甕を埋めて仕事をしていた。

塩澤家の道の反対側に流れる川が、紺屋塩澤家の水仕事の場所であった。奇しくも『静岡市安西一丁目町誌』“わが町のおもいで”に載っている大きな木の下に描かれた石、それが塩澤家の“たたき石”であった。川にさらした反物を、その石にたたきつけて水を切る様子を、当時取材に応じて下さった町内の長老斉藤豊作氏（明治 42 年生）が語ってくれた。しかしその豊作氏は平成 14 年に亡くなられ、この事実を知り語れる人はもういないのではないかと思われる。その後道路整備のためにこの水路が使えなくなった事もあって、昭和元年の頃、現在の静岡市立末広中学校の正門前に、200 坪の土地を購入し、そこで仕事場を持ち仕事をするようになったのである。

当時塩澤家は『法被紺屋』と呼ばれ、おねりの法被や消防団・材木屋・商人等、特に松坂屋・丸通（現在の日通）の法被は長い間よく染めたと言う。どこに行くにも、何をするにも名入りの法被が使われた時代であり、“藍で染める紺地の色がよい”と評判の紺屋で、注文が多かったようである。その他のれん、カーテン、風呂敷等を染めていたが、戦争ですべてを焼きつくし、再興した後は、時代の流れとともに、法被の注文より京都の呉服商の注文による反物が多く、現当主勝利氏の父親源吾の代では反物中心の紺屋になっていた。

末広町の仕事場には広い干場があったが、運悪く隣の敷地に高い建物が建ち、干し場の半分が陰になってしまうという事態が生じた。そこで塩澤家はこの末広町のほとんどを処分し、陽がいっぱいあたる駿河湾に面した海岸に近い現在の静岡市駿河区敷地 2 丁目に広い土地を求め移転した。昭和 42 年頃である。そこへも芹沢銈介は東京から「このはな会」の人達をバスに乗せてきたことがあった。

塩澤源吾の長男として代を継いだ勝利氏（昭和 16 年生）は、長男ということでなんということもなく自然の成り行きで紺屋を引き継いだと言われる。親の言うとおりに、当時芹沢

銈介が多摩美術大学の名誉教授であったご縁から、そこに4年間通い、家に帰ってきた時は、親の見よう見まねで仕事を覚えた。

移転した広い土地での仕事場が、勝利氏の城となった。当時京都の問屋さんと組んでの仕事であった。不安もあったが、問屋さんからの技術的な面での太鼓判を押され、何とかがんばれた。 その後その問屋さんは東京にも手を広げていったので、塩澤家の仕事は主に、京都、東京の問屋からの反物を染めることが中心となっていった。

反物2反が一直線に干すことが出来る広い干し場があり、近代的な乾燥機を特注して取り付け、多い時は通いの職人さんも含めると12，3人くらいの職人を抱えていた時もあった。中には、芹沢銈介の口利きで、沖縄の首里高校の卒業生も預かったことがあった。工場の2階が宿舎になっていて、首里高校から常に2，3人の女子の卒業生が入れ替わり交代で働いていて、食事の支度は賄のお手伝いさんと一緒にしていた。

しかし、着物を着る人達がだんだん少なくなり、それと共に問屋での売れ行きが減り、塩澤家への注文が無くなってきた。 特に東京の問屋の方が時代の反応が早かったと勝利氏は語る。関西ではそれでも兵庫あたりまで需要があり、ぼちぼちながらも仕事は続いていたが、最後の2、3年は勝利氏1人で仕事をこなしていたという。

着物文化が徐々に薄れ、京都方面はそれでもまだ需要はあったものの、「このように出血がダラダラ続くようでは、もうこの先はない。」と仕事を止める決心には、ためらいはなかったようである。

こうして平成4年、この大きな紺屋塩澤家は、紺屋としての仕事を終えた。勝利氏49歳の時であった。現在は広い土地を利用されてガレージ経営をされている。

⑵ 染職人　斉藤博司様　（静岡市駿河区在住）昭和11年4月生

斉藤博司様（昭和11年4月生）は、昭和27年静岡が生んだ人間国宝芹沢銈介と時代を同じく活躍していた染色作家増田邦太郎氏（1893 ～ 1971）の工場（こうば）に、中学を卒業すると同時に職業安定所の紹介で就職された。

「同居していた祖父が下駄の蒔絵職人であったことから、常に手仕事は目にしていたので、染工場への就職には何ら抵抗はなかった。特にどうしてもこの仕事をやりたいという思いではなかったが、手仕事への多少の興味はあったのかもしれない。母親も3年くらい遊ぶつもりで、というような感じで、親から特にたいした期待をもっていたとは思えない就職であった」と氏は振り返り話される。

「旧静岡市稲川にかつてあった工場(こうば)へは住込みではなく、毎日朝8:00から夕方6:00頃までの労働時間で、弁当持参で通った。昼食は家族とは別に工場で食べたが、お茶は親方の奥様（通称おばあさん）が工場まで運んでくれた。休みは毎月1日と15日。日曜日も仕事をしたので、たまに日曜日が休日と重なる時は、家族や世間の人達と同じ休みであることがうれしかった。」と話される。その他盆の7月13，14，15日の3日間、12月は31日まで仕事をやって、正月には元旦から5日までゆっくり休めたようだ。しかし今日の労働条件からすると、かなり厳しい条件での就労であったことが感じられるが、職人世界の一般的な労働条件だったのかもしれない。

給料はお小遣い程度の3,000円であった。しかし3年経った19歳の時、親方が「お金では無くなってしまうから」と言って、現在の東名静岡インター近くに73坪の土地を用意し

てくれた。当時は広い田園地帯ではあったが、現在は東名高速道路が東西に延びる静岡の交通の拠点地域になっている場所である。斉藤氏は、「20 歳前から自分で固定資産税を払っていたんだよ。」と誇らしげに話された。

親方の増田邦太郎氏は温和な人で、親方に叱られたことは一度もない。失敗しても「若い時は失敗は付き物」という感じでいつも暖かく見守ってくれていた。斉藤氏は 19 歳の自分に土地を用意してくれたことにとても恩を感じ、壁には何度となくぶつかったものの、「辞めたいと思ったことはなかった。これまで見てくれる増田氏に対して辞めるなんてことは到底あり得なかった。」と話される。

染色の技術は親方から手ほどきを受けたり、教えてもらったというようなことはなく、見て、まねして覚えていった。

就職して半年くらいで“型”をつけていた時、時折仕事の下請等で寄っていた今は亡き秋山浩氏から、「2・3 年早いぞ」と言われたことを覚えている。秋山氏は若い頃、東京蒲田に仕事場をもたれた芹沢銈介の下で働いたこともあり、静岡に戻っても芹沢銈介の仕事を受けたりしていた職人であった。

染めに欠かせない“糊”・“豆汁（ごじる）”を作る時、それに用いる材料の量を量ることはなく、ほとんど目分量とその日の天候の様子で、“勘”で仕事をしていた。染める素材や何を作るものなのか、すなわちテーブルセンターなのか暖簾なのかといった作るものによって、それぞれ“勘”を働かせて整えていった。

人間国宝清水幸太郎氏は「染め上がりを左右するのは、糊の煮ぐあい糊のできぐあい[1)]」と言う。この“糊”が作れるようになることが、まず職人としての最初の関門でありずっと通しての課題でもある。“糊”なくして型染めは始まらないのである。

斉藤氏が、その“糊”をうまく作れるようになったのは、神戸の問屋から、布でなく魚網を素材とする暖簾の大量の注文があり、一日おきに“糊”を作ったことが、大きな自信になったと言われる。斉藤氏も「染めは 1 糊、2 糊、3 に糊」と、“糊”の存在を最も大切にされていた。

藍甕は 2 つ。藍染めが中心の染めであった。藍は静岡の紺屋のほとんどが合成藍（インジゴピュアー）を用いていた。

当時は家庭用の暖簾の注文が多く、納期が半年から 1 年くらい遅れてしまうほど仕事に追われ、仕事をやってもやっても追いつかないほどであった。

その後親方増田邦太郎氏の娘と結婚された増田猪富氏が現駿河区石田で独立したため、忙しい時は昼間は稲川の工場、夜は石田の工場へと行ったり来たりしていた。最終的には石田の増田家に籍を移し、そこで働くようになった。このようにして斉藤氏は、染職人として増田家親子二代に亘って仕えたのである。

結婚後は、職人として何とか生活できる給料はいただいていた。石田の『増田愛染工場』に移った頃も、問屋からの仕事が相変わらず多く、暖簾・テーブルセンターが主な仕事であった。暖簾の仕立ては、大将（石田の増田氏をそう呼んでいた）の奥さんや近隣の人達に頼んで仕上げていた。そして、また大将が日展・現代工芸美術展に出品する“糊”は、全部一週間も前から準備し、型を付ける当日に最も適した“糊”になるよう調節をしていたのも斉藤氏であった。さらに大将が静岡大学で教鞭をとっていたことから、静大生も出入りし、その多くの学生の面倒も斉藤氏が引き受けてくれていた。筆者もその一人で、日展・現代工芸美

術展・県展等に出品のおりは、斉藤氏に“糊”の準備をしていただいた。また市内在住の染色家もイザという時は、斉藤氏の作った“糊”を求めに来ていたりと、染色を志す人達は斉藤氏をたよりにしていた。

この間斉藤氏自信も、日本民藝展、静岡クラフト展、県展、市展等に作品を出品し、多くの賞を受賞するなど研鑽にも努めていた。

「斉藤君も年をとってきたので、これまでのような給料を出せない。」と大将に言われ大きなショックを受け、さらにこれまでの大将との微妙な人間関係のずれが、「これ以上ここに留まることはできない。」と退職することになった。

昭和59年、48才の時であった。48才という職人として正にこれから円熟の域に入ろうかという時であっただけに、その時の無念さはいかばかりであっただろうか。脂の乗りきった職人として最も輝いている時の引退は、さぞかし無念にあったに違いない。氏が流した涙を筆者は忘れない。

斉藤氏は33年間染職人として増田家一筋に仕えた、静岡生粋の染め職人であった。

その後全く染色とは関わりのない仕事に就いたが、会社訪問をした折、履歴書をみた会社の担当者は、中学卒業後ずっと同じ一つの仕事を続けてきたことに対して高い評価を下され、すぐに採用決定通知をくれたという。こうして斉藤氏は職人から一般会社で65才まで働き、その後は静岡市内にある辻村和服専門学校のクラブ活動の中で、学生に染色の指導をされている。

⑶　四代目『紺虎』鷲巣昭弘氏　（静岡市葵区在住）昭和19年生 11月生

安西1丁目の『鷲巣染物店』は、明治初期に鷲巣昭弘氏の曽祖父・鷲巣作蔵（天保2年～明治34年）が始めた染物店と伝えられ、二代目鷲巣虎吉（明治6年～昭和19年）の代から通称『紺虎』と呼ばれていた。虎吉は、何歳の頃か不明だが、京都の染物店で修業を積んだ後に、『鷲巣染物店』に戻り家業を継いだ。

虎吉の時代、店舗は安西通りに面した約3間（6ｍ弱）の間口で、店の奥に住居スペースがあり、そのまた奥に細長い仕事場と染め上がった着物を乾す「張り場」が続き、奥行きはおよそ30間（50ｍ位）ほどあった。この佇まいは、戦争で空襲に遭うまで存在していた。昭弘氏の11歳年上の姉佳子様から、仕事場にあった型染めの糊を洗い流すプール様の洗い場は、夏になると子ども達の水遊び場となったことを、昭弘氏は聞いている。

虎吉には三男二女があり、長男「菊太郎」が『紺虎』の跡を継ぐ予定だったが、若くして亡くなったために、昭弘氏の父である二男「博治」が静岡商業学校を卒業後、虎吉と同じように京都に修行に行き跡を継いだ。本来「博治」は、遠縁にあたる市内新通りにある『鷲巣染物店』に後継ぎがなかったため、そこへ養子に行くことになっていたようであるが、長男が亡くなったため急遽『紺虎』の跡を継ぐことになった。そこで新通りの『鷲巣染物店』には、すぐ上の二女「せつ」が代わりに養女として行き、婿を取り『新通り鷲巣染物店』を継ぐ形となった。長女「とよ」も市内手越にあった『青木染物店』に嫁いだ。また後を継いだ博治の妻も、市内伝馬町の老舗『松本染物店』から嫁に来たものであった。子ども達を「染物店」関係に縁を求めた虎吉であったが、家業の繁栄と存続を願ってのことであろう、このように同業者である染物屋同士の縁組が当時行なわれていたようである。

昭和の初め頃は、修行から帰った昭弘氏の父親すなわち『紺虎』3代目「博治」と、祖父

にあたる 2 代目の「虎吉」とで京染を盛んにやっていて、常時京都の職人が何人か来ていたようである。

しかし昭和 10 年代に入るや戦争の兆しが見え始め、父親は職業軍人として軍隊に入ったため留守が多く、殆どは祖父の虎吉と職人とで仕事を続けていた。

昭弘氏が母の胎内にいた頃、虎吉は「今度は男だ」と盛んに『紺虎四代目』を期待していたようであったが、昭和 19 年 8 月に昭弘氏の顔を見ることなく 71 歳の生涯を閉じた。

戦争が終わり、戦地から戻った父親が空襲で焼けた家を復興させ、まだ丸坊主のままで仕事場に立っていた姿を、昭弘氏はうっすらと覚えている。終戦後すぐは、食糧にも事欠く時代であり、当然のことながらおしゃれな着物を着ること等なく、染物屋には殆ど仕事もなかったであろうと昭弘氏は回想する。家計のやりくりはかなりの厳しさだったようで、小学校の低学年の頃、宿題か何かで「家の収入はどのくらいか調べてきなさい」という事があって、母親に聞いたところ、母親は顔をゆがめて、「なんでそんなことを聞かせるのか？」と言った後、「適当に 4,000 円位と言っておくように」と云われたことを記憶している。「本当のところは 4,000 円より多かったのか少なかったのかは分からないが、当時のサラリーマンの給料が、多分 7 ～ 8 千円の時代ではなかったかと推測すると、かなり貧しかったのではないか」と言われる。

「父親は町内会の仕事や PTA の仕事など熱心にこなし、周囲からも信頼を寄せられていたようであるが、家の中では寡黙で殆ど話はしなかった。11 歳年上の姉がもし男であったら、多分跡取りとして教育したのではなかったかと思えるが、私に対しては仕事について話したり、興味を抱かせるような方向付けなどはなかったように思う。」と昭弘氏は語る。

戦争が終わってからの時代は急速に復興が進み、生活様式も欧米化の波が覆い、服飾文化も着物から洋服に、そして化学繊維、化学染料などの普及により安価で手軽なものがあふれ『紺虎』の仕事も大きく変った。京染の注文も著しく減少し、仕事内容は、法被、暖簾、手ぬぐい、油単といったものが中心となっていった。着物に関しても、染物は京都に発注するようになり、もっぱら、洗い張り、湯通しなどが日常の主な仕事になっていった。「悉皆屋」と名乗りを上げないまでも「悉皆屋」としての内容であったようだ。

昭弘氏が中学 3 年生になり、高校進学を決意しなければならなかった時、母親から「染物屋はもう終わりだ。職人の時代は過去のもの。これからは地道なサラリーマンの道を歩いたほうがいい。」と言われたようだが、父親からは特に「跡を継げとか、職人になれ」といった話はなく、黙って母親の話を聞いていただけであったようである。母親にすれば職人の妻として、戦後の苦しい時代を生きた苦労がそう言わせたのかもしれないが、父親はいったい何を考えていたのか、息子には染め職人としての才能はないと見越していたのか、父親の想いを聞くこともなく、そのまま昭弘氏は漠然と進学校に進まれた。

その後も昭弘氏は、自分の進路について悶々としながら過ごしたようであるが、ある時から家業の染物に少しでも関係する会社に勤めようという思いに至り、染料などの化学工業製品の会社が浮かんだ。しかし実際には化学は化学でも大手医薬品会社に就職し、全国を歩き、営業所長をも歴任され定年退職をされた。

昭弘氏は、「改めて自分の人生を振り返った時、『紺虎』四代目を継いでいたら、どんな人生だっただろうかと思う事もあるが、あの時父は何を考え、何を言いたかったのか、聞いてみたいという思いも心のどこかにある。」としみじみ語られる。

⑷「正雪紺屋」吉岡統一郎氏　（静岡市清水区由比在住）昭和 24 年 9 月生

正雪紺屋は元由比宿の本陣の正面に位置している。由比正雪生家として知られ、すでにその時は紺屋をやっていたと言われている江戸時代からの老舗である。いつの頃からか「鹿島屋」という旅籠をも兼ねていたということであるが、所有される型紙の中に確かに朱書きで「かしまや」と書かれた文字が確認できた。

資料⑷－ 1
由比宿本陣正面にある正雪紺屋

正雪がその多彩な人生を閉じた（自害）のは、慶安 4 年（1651 年）7 月 26 日駿府梅屋という旅宿であった。その時 47 才とも 42 才とも言われているが、このことから逆算すると出生は慶長 10 年（1605 年）あるいは 15 年（1610 年）ということになり、いずれにしても 17 世紀の初めにはすでに紺屋をやっていたということになる。しかしその出生地は駿府説もあり、歴史学者においても結論に至っていないというのが実状のようであるが、吉岡家では正雪を祀ってある祠が現在もある。正雪最後の模様が詳しく書かれ、今日において最も信頼のおける資料とされる『草川覚書』に正雪の遺書が公表されるや、反逆者としての由比正雪から逆にその精神が多くの人々に見直されるようになった。そして新しい時代になって、もはや咎められることもないだろうと吉岡家ではこの『正雪紺屋』を表に出したようである。現在の建物は、由比の大火（文政 10 年）ですべてを焼失した後に建設されたもので、180 年余の歴史を持ったものである。

資料⑷－ 2　正雪を祀る祠

『正雪紺屋』には型紙が 2,000 枚近く所蔵されているが、その中に江戸時代この東海道筋を中心に型紙を売り歩いていた伊勢の型屋嶋村の商印（資料 4 － 3）が確認された。伊勢の型売り仲間は紀州徳川家の強力な保護の下に株仲間を形成し、寛延 3 年（1753 年）初めて行商圏を定め、全国を行商して歩いた。

資料⑷－ 3
新たに発見できた
嶋村の商印
（赤外線撮影）

中田氏の研究『伊勢型紙の歴史』（P 144）によれば、文化 4 年（1807 年）の道中行き五郎左衛門の行商地域は、三州（三河国の別称）藤川から売り初め、遠江国・駿河国を経て相模国の藤沢で終わっている。駿州（駿河国の別称）での売り場は、嶋田宿・藤枝宿御城下・岡部宿・丸子宿・府中宿御城下町中・江尻宿・奥津宿・由井宿・蒲原宿・吉原宿・原宿・沼津宿御城下へと行商は続く。おそらく『正雪紺屋』においては、当時この中の由井宿で取り引きが行われたのではないかと推測される。また天保 5 年（1834 年）の型売り株仲間台帳から道中行には、

中村屋源六・山中屋五郎大夫・倉田屋五郎左衛門・松井屋兵助・嶋村屋兵助・嶋村屋甚七・長谷川屋瀬六・奥山屋次郎右衛門の株仲間が記録されている。今回吉岡家の型紙の中に確認された嶋村の商印は、確かに江戸時代に販売されていた型紙であることを裏付けるものであろう。しかし、今回確認されたこの商印は、これまでの筆者の商印研究において、『殿様紺屋』といわれた静岡の新間家、また県の文化財に指定されている水窪の守屋家の型紙に押された「嶋村」の商印とは異なった初めて目にする商印であった。この商印が江戸時代のいつの年代のものなのかは、残念ながら現在の日本における商印研究においては断定できない状況である。しかし、“少なくとも幕末から明治にかけて一代での営業期間であった新間家の型紙より以前のものである”ことには違いない。2,000 枚近い正雪紺屋の型紙には、何が隠されているのか大変興味深い。

さて現在の当主吉岡統一郎氏は、歴史を辿って数えたことはないが、一緒に仕事をした祖父が 16 代目と言っていたので、自分は 18 代目だと認識している。

高校生の 17 歳の時、父を 51 歳の若さで亡くされ、静岡にあった法経短大卒業後すぐに、名古屋岩倉の中島屋代助商店という紺屋に修行に出た。親方の家に住み込み、朝、昼、夜の三食すべて親方の家族と一緒に食べ、風呂も家族と同じで、家族同様の待遇であった。仕事は朝 8 時頃から始まり、夕方 5 時頃を目途に仕事の切りの良いところで終わった。当時の教えはすべて「勘」であり、眼で見て、試して覚えていく、という方法であった。現在のように計量化した方法で仕事をしていくことはなかったが、氏は“備忘録”を手元に置き、自分なりの記録をとっていた。通常 3 年間の住込みの修行であったが、父親が亡くなったという特別の事情で、1 年間の修行であった。昭和 47，8 年の頃で、徒弟制度最後の頃ではなかったかと思う。給料はお小遣い程度であったが、他に遊ぶ事もなかったので特に問題はなかった。

基本的なことは修行で学んできたので、家にもどってからは祖父、祖母に聞きながら、工夫しながらやりやすい方法でやってきた。祖父も当時あまり健康にはすぐれなかったので、ほとんど一人でこなさなければならず、年が若いということでお客様からはなかなか信用してもらえず苦労した。

先の代で明治初期の頃、清水の商家から婿に来た当主は、とても商いに熱心で、この近隣でとれる“みかん”を北海道にまで運び商売をしていた。その帰りに北海道から名入りの法被や前掛けの注文を取ってきて、紺屋の営業活動に励んでいた。鉄道が伸びるたびにその終点にまでみかんを運び、そして紺屋の仕事を取ってくるという仕事振りであった。稚内の“ふるやきゃらめる”の創業者とも懇親を深め、家では染職人を抱えて商品を生産するという様子であった。

資料(4)－4　30 個の藍甕が並ぶ甕場

藍甕も物心ついた頃からすでに 30 個あり、自分のところで藍の葉を陰干していたことを覚えている。藍甕の数は、その紺屋の経営規模を表すと言われている[2)]

が、藍甕30個という規模は、その時の仕事の量が、いかに多いものであったかを伺い知ることが出来る。甕1個の大きさは1石2斗（約200リットル）である。

戦後は統制のもと田舎の紺屋として、洗い張りから地域に係るもの、すべてを受けていた。親の代では明治から昭和へと生活様式が大きく変わり、特に着物から洋服の時代になったことにより、仕事の内容も大きく変わった。そしてその時代時代に合わせ、染める中身も変わらざるをえなかった。

氏が染職人として家業に就いた時も、先代から続く北海道からの印半纏や前掛けは大量に扱っていたが、時代が進むにつれだんだんそれらの仕事の量は減ってきた。暖簾、風呂敷、手拭、と布に関る仕事は何でも引き受けた。このほか社旗、売り出しの旗、スポーツクラブの旗なども作った。「いつの時代でも、当主はその時その時を精一杯時代に合わせて生きてきたのだろうと思います。私も親の仕事をそのまま引き継ぐということより、親がしていた仕事とは全く違う、今の時代に合わせた仕事を工夫してきました。」と感慨深く話される吉岡氏である。

氏が所属している清庵地区の組合に加入している紺屋は、かつて20軒くらいあったが現在は9軒、籍はあっても後を継ぐ者がなく、組合活動は主に情報交換や懇親会が中心になってしまっているような状態である。後を継ぐ息子がいないという紺屋では、以前には、その家の技術は決して外には教えなかったことも、行けば教えてもらえるという良いこともあった。氏は、教えられないものを見て覚え、それを臨機応変に活用していった。

趣味でやるのとちがい、商売となると納められない品物はお金にならない。お金を手にして初めて仕事をしたことになるので大変気を使った。近年の染色技術は、風合いも、日光の堅牢度も良く、しかも安価で、自分が染めていたら質はともかく、とてもその値段にたちうち出来ない事もある。今はお客の希望を聞き、どのような目的で・どのような物を・いつまでに・予算は・といった内容を聞き出し、お客さんが満足される品物を提供するために、時には自分でデザインをすることもある。これも自分が“職人として仕事を続けているからこそできること”であって、染めることが何もわからない人にはできないことだと思っている。

この正雪紺屋の今後については、子どもに「継いでほしい」と言ったことはなかったと言われる。氏自身は父親が亡くなり、さして抵抗もなくこの道に進むことが出来た。しかし、もし父親が健在で、職業を選択する自由があったならば、ひょっとして違う道に進んでいたかもしれないという思いが、氏の胸中のどこかにくすぶっていたことも事実だった。そして息子にその時期が来た時、息子は“やりたい”とは言わなかった。息子の本心を知った氏は、「人にはそれぞれ性格も、またこの仕事については特に向き・不向きもある。自分に志すものがあれば、自分の好きなことをさせてやりたい。」と、氏自身を顧みて子どもの意思を尊重された。しかし親として子どもの決断には、かなりの葛藤が話の中から伺えた。また息子が継がなくても、本当にやってみたいと思う者が出てきたら、それはそれでいいのではないかと考えている。

18代目を継いでいる当主吉岡統一郎氏の話である。

⑸　人間国宝「千葉あやの」の藍染を伝える千葉まつえ様

（宮城県栗駒市在住）　昭和5年1月生

千葉家で正藍冷染（しょうあいひやぞめ）と呼んでいる正藍染は、わが国古来の技法を伝

える藍染である。かつて我が国も農村では自給自足を建前とし、家族の衣料品や調度品は各家庭で作られてきた。今日では日常的に全く見ることがなくなった麻や木綿を栽培し、自らが藍を育て、藍甕に仕込み、灰汁を入れよく撹拌し、醗酵させて藍を建て、糸を染める、という古来の藍染めが、栗駒市栗駒に戦後まで伝えられていた。この技法を伝えていたのは“千葉あやの”で“あやの”の技法の特色は、藍建や藍の管理に一切人工的な加熱を行わないことである。そのために気候条件が合う、夏期の 6.7 月の二か月だけが藍染めを行う期間となる。これは古い藍染の姿を伝えるものであり、他の藍染法と区別し「正藍染」として 1955 年（昭和 30 年）重要無形文化財保持者に認定された。

今年は天候の加減かあまり大きくは育たなかったが、藍のご機嫌はよかったようである。ご機嫌の悪い時には、おばあさん（あやの）は、お酒を混ぜていたことをまつ枝様は覚えている。

“千葉あやの”が千葉家に嫁いできた当時、千葉家では当時養蚕 , と麻織、藍栽培、染めの一貫作業を行っていた。あやのは姑からその技術を厳しく教え込まれたが、もとより手先が器用であったため、すぐに上達したようである。

資料(5)－１　千葉家の周囲

明治になって目覚ましい鉄道の発展は、東北本線やさらに東北本線石越駅から細倉鉱山へ続く栗原軌道の開通にと及び、栗駒一帯にも一気に近代化の波が押し寄せてきた。それに伴い安価な衣料が流入するようになり、もはや栗駒においてさえ衣料自給の必要が無くなり、この地に伝承された正藍染や麻栽培を止める人が出てきた。

そのような状況下においても、千葉家では“あやの”から娘の“よしの”そして孫娘の“まつえ様”へとこの藍染技法が引き継がれ、現在は県の正藍染技術保存伝承事業に取り上げられている。現在この栗原地域は、鉱山の閉鎖や自家用車の普及によって鉄道を利用する人達がめっきり減少し、鉄道は閉鎖され , のどかな田園風景が一帯に広がっている

さて千葉まつえ様は、二人の娘は仙台に嫁ぎ、栗原文字の家には、現在長男と孫（男性）との三人暮らしである。

「嫁いできた時には農家の仕事が中心で、雨が降って外仕事ができない時に、おばあさん（あやの）の仕事の手伝いをしていた。本格的には昭和 55 年おばあさんが亡くなってからのこと。ずっと手助けはしていたので、一人になって特別に困ることはなかった。」と話される。

“あやの”が主に活躍していた当時、裏の畑で麻を栽培し、糸にまでした。糸にするまでが大変な作業で次のような工程で行った。

① 4 月に種を蒔いて、8 月末までに麻をひく（抜き取る）
② ひいた麻は、根と葉を切って、茎だけを残す
③ 茎は天日でよく乾燥させる
④ 乾燥した茎を水につけて、皮を剥ぐ

⑤　皮を剥いだ茎を煮て、削いで、真ん中の繊維だけを取り出す

主として、冬場にこの仕事をするのが常であった。それから糸にし、反物にするには１年はかかる作業になり、現在まつ江様は、家の仕事と畑の仕事で１年に１反はなかなか大変で、できないこともあると言われる。最近では麻の反物を購入して、藍に染めることもあるようだ。

資料(5)－２　まつえ様の仕事場

また「“あやの”の時代には、仙台のデパート（藤崎デパート）から型をつけた反物を預り、藍で地染めをするという仕事をしていたんです。最近はデパートからの注文はほとんどなくなりました。着物を着る人がいなくなったこの頃は、毎年反物を染めることはほとんどないですね。」と言われる。織り機には織っている途中の反物が吊られていたが、「綿糸を買って、糸を染め、１年掛かって１反織っても生活は成り立たないですよね。」と優しい笑みを浮かべながら話して下さるまつえ様が印象的であった。

藍を建てるには木灰が必要でこれも千葉家自家製である。

「冬になると、毎日炭を焚いて“あく”をとる。次の日の朝ほんの少しの灰色に固まっている“あく”を採り、カンに入れ溜める。これを３ヶ月ほど続けるが、その炭は近隣の楢の木で焼いていました。」と言う。東日本大震災のその前の地震までは、近所の知り合いの方が炭を焚いてくれていたが、炭焼き釜が地震で壊れ、今は焼くことが出来なくなってしまった。古来の自給自足で行ってきた技法も、今日においては炭にする楢の木も無くなり、炭を焼く窯も無くなりと、これまで伝えてきたことがなかなか思うようにはならないようである。その後、炭は森林組合に頼んで山形県から手に入れていると言う。

また、これまで裏山から取っていた染には欠かせない水が、大雨で水道（みずみち）が変わり途方にくれていたが、何とか今年になって裏山の上の方で流れている水を、タンクにためて使用する設備を近所の業者の人に頼んでできたと安堵されている。

資料(5)－３　栗駒市寄贈の木桶

深さ３尺８寸　３尺５寸×２寸の楕円形の木桶

「“あやの”の代に50数年も長いこと使っていた木桶は、当時町長さんからいただいたものでした。その木桶の底が腐り使えなくなってしまい、作ってくれるところもなく困っていたんです。現在使っている木桶は、藍染めの里“愛藍人・文字”ができた時に、栗駒市からいただいたものです。」と心から感謝されている。

今まで伝えてきた正藍染も、それができなくなった時の対応が、個人の力ではできにくくなっている状況が痛いほど感じられた。

今は、姪の千葉京子さんがまつえさんのお手伝いをしてくれている。子どもが怪我をして学校を休んでいた時、たまたま叔母のまつ江さんのお手伝いをしたことがきっかけで、暇があればお手伝いをするようになられたようだ。「おばあさん一人でやるのはとても大変だから、今はお手伝いのつもりでいます。」と言われる京子さんの横で、「京子ちゃんは、のりの

資料(5)－４
まつえ様を手伝う姪の千葉京子様

作り方も、型つけももう大丈夫。京子ちゃんならやっていける。」と太鼓判を押す。また県の職員の方からも後継者として強い要請があるようだ。

筆者が伺うことを知り、駆け付けて来て下さった京子さんにお目にかかり、昨年の夏千葉家にお伺いした時とは全く違う安堵感が筆者の胸に広がった。

まつ江様は「年をとっての楽しみでもあり、生きがいです。苦労な仕事ですが、これなかったら80歳でボケていたかもしれません。」と終始にこやかに穏やかに話して下さった。京子さんがそばにいてくれることが、どんなにか心強く思っている事かが伺えた。

(6)「地細工紺屋」若松智氏　（愛媛県八幡浜市在住）　昭和22年6月生

2012年日本経済新聞企画「200年企業」に掲載された愛媛県八幡浜市にある現「地細工紺屋」若松旗店の創業は1822年、初代は廣吉に始まる。

筆者が初めてここを訪れたのは2008年。型紙に押された商印の研究で訪れた時であった。

資料(6)－１　若松旗店店内

「地細工紺屋」若松旗店の創業時は、現八幡浜市立総合病院のある周辺一帯が若松家の所有する土地であった。おそらく先代から引き継いだ広大な土地が基盤になっての創業ではなかったかと奥様の若松留美様は語る。向灘高城という地名にちなんで、江戸時代には“高城紺屋”と呼ばれていた。しかし江戸時代に“高城紺屋”と呼ばれていた屋敷と広い土地は、その後二代目廣吉と三代目禮蔵の子の“請判”により人手に渡ってしまった。

現在の工房は江戸末期に建てられた物で、四代目五朗が当主であった時、三男であった智氏が元市長の実家から買い取ったものである。

当時文化人として名声を博した四代目五朗の骨董収集や茶道へのこだわりは並大抵のものではなく、羽振りの良かった時代を象徴する品々が、現在も若松家にはあちこちに垣間見られる。

この由緒ある工房を買い取られた現在五代目当主若松智氏は、６人兄弟の三男である。氏が高校卒業の頃には、上の兄２人は既に家を出ていた。そんな中、兄弟の中で一番手先が器用であった智氏が、母親の強い薦めもあって高校卒業後すぐにこの道に進んだ。

「小さい頃から父親の仕事をずっとみていたので、ただ単に薦められたからという理由だけでこの道に入ったのではなく、やらねばならない気構えもすでにできていた。」と話される。

資料(6)－２　若松旗店の仕事場

染色には欠かせない“糊”は、母の手伝いをしながら覚えた。すべて目分量で、今のようにはかりで量ることはしなかった。

「この道に入って思うことは、伝統的に継がれている紺屋の仕事は、教えられてできるものではない。場数を踏んでその経験が“勘”を生みだしてくれる。その“勘”ができてくると、その人の味が出てくる。父親のやることをただ見よう見まねだけでやっていたのでは、自分の味は出てこない。その技術が自分のものになって初めて自分の味がでてくる。自分が納得するまでのものになるのには、相当な時間がかかります。」と話される。職人として今日まで続けてこられたからこそ生み出された、職人でしか味わえない、職人としての気迫のこもった気質が伝わる言葉であった。

こうして父親を師として何とか充分技術的な引き継ぎができた30歳の頃、父親が倒れた。仕事そのものは身についていたものの、注文から染め、そして完成品にして納める工程すべてを、一人でこなさなければならない境遇に陥った時には本当に苦しかった。と智氏は語る。

幸い父親はその後、下絵の仕事ができるほどに回復されたが、智氏が39歳の時他界された。トロール漁業最盛期の頃で、大漁旗の注文に追われていた時代であった。しかしその後1990年代になると、温暖化による潮流の流れが変わり漁獲量が少なくなったこと、オイルショックでオイルの値段が高騰し採算が合わなくなってしまったこと、そして情報通信の技術の開発で、その日のうちに全国の漁獲量が示され魚の値段が決まり、大漁であっても値段が下がり営業成果が出なくなったこと、また貯蔵技術の開発により、海外の冷凍物の方が安く手に入ることなど、これまでのような漁業の内容が全く変わり、地元漁業会社の廃業が相次いだ。情報通信の大きな役目であった大漁旗も、もはやその任務も終え、大漁旗を染めるという仕事は全く無くなってきてしまった。“あっという間の出来事であった”と若松氏の奥様は語る。地元の廃校になった小・中学校を利用してアワビやナマコの養殖が行われるようになり、海での漁が陸地で行われるようになった今日である。「もうそこには漁師としての技は、どこかにいってしまった。」と奥様は嘆かれる。

このような時代が来るのではないかと、その空気をいち早く察した若松旗店では、地細工紺屋として武者幟、地域に根差した祭礼衣装、神社幟、紋章、油単、手拭、風呂敷等、手でできる仕事は何でも引き受け、大漁旗に代わる仕事に果敢に挑戦し、その苦境を乗り越えるのに必死であった。大漁旗だけに頼っていた同業者は、続けていくことは難しかったようである。近年ではワールドカップ日韓大会（2002年）でのポルトガルの応援法被をデザインしたり、進水式のお祝いの品として船会社から袢纏の注文がありそれをカナダに納めたり、また日本的な図柄のタペストリーをギリシャ・ベルギー・フランスにと納めたりと、海外からも脚光を浴び出している。

このような努力が実を結び、智氏は平成25年愛媛県の伝統工芸士に認定された。

若松家では、これまで受け継いできたこの遺産を次代に繋げていきたいと、現在、長男崇

さんが工房に立っている。

「その家に生まれ、その家で生活しているからこそできる技、それは教えて出来るものではなく、自分で実践しなければ体得できない。」と、父親智氏は語る。

崇さんは高校時代から書道を学んできた。それは若松家の教育のなかで、日本人として生まれてきたからには何か一つ“道”の付くものを身に付けさせたいと崇さんに諭した。そして崇さんが選んだ“道”が“書”であった。書の先生は、母親の古くからの知人である宮司さんのご子息で、高校の教師をされている方である。その先生から崇さんは「宮司と染は誇りがあればやっていける」と、よく励まされたようである。現在も作品を発表することより、ずっと続ける、書き続ける事に意義があると、毎週書道教室に通っている。

資料（6）－3
親子で仕事場に立つ若松旗店

その後崇さんは京都でデザインの勉強をされ、一時はグラフィックでダイナーとして就職することも考えた。そして初めて会社訪問をした時、そこには大学等で最新の技術を身に付けた若い従業員だけで組織され、ずっと長く勤めている人達がいないことを自分の目で確認した時、“こういう所では使い捨てにされるだけだ”と会社勤めに疑問を持ち始め、改めて家業を振り返るきっかけとなった。小さい頃から親や友達からも家を継ぐことを薦められていたので、無理はなかったようだ。「お客さんが来てくれる、お客さんが喜んでくれる仕事ができる、喜んでいただいてお金がいただける、こんな素敵な仕事は他にはないのではないか。」と母親の薦めもあった。しかし、父親の智さんは「私は続けてほしい。ということは、一切口にしなかった。」と言われる。現在崇さんは、今ある仕事を満足できるように、父親がやってきた仕事をしっかり身に付けることだけに集中して精を出されている。また「絵や書を学んできたことが、今とても役に立っている。」と話す頼もしい後継者である。

“日本の長い歴史を振り返ってみると、それぞれの時代にはそれぞれの生活文化の中で、職人の作られた良いものとか作品等が残っている。しかし平成には何が残っていくのだろうと考えると、電子機器はあっという間の命で移り変わり、進化の一途をたどるコンピューターも突然のアクシデントに瞬時に消えてしまうなど、科学の進歩に驚嘆するも、何かむなしさをも感じている。平成の時代は後世になって探しようもない時代になってしまうのではないか。そう思うとこういう時代だからこそ私達は百年二百年過ぎて、後世の人達から平成ってなんだったのかと笑われないように、日々使っているものが美しいとか使い心地が良いとか思っていただけるような、そして、次の時代の人に手渡され、残していっていただけるような作品を作っていくこと、これが今この時代を生きるすべであり、心意気と思っています。”若松旗店の熱い熱い思いである。

3．まとめ

以上、筆者とほぼ同じ時代を歩んで来られた6人の皆様から直接お話を聞かせていただいたが、染職人斉藤様以外は、“染める”ことで代を重ね長い年月を生きぬいてきた人達である。そして今ここにきて、それぞれがそれぞれのおかれた立場に立って、厳しい選択を迫られつつ歩いてきていることが分かる。ここでいくつかの課題が見えてきた。

①　激しい時代の流れと職人気質

かつて日本は、職人が一世を風靡した時代があった。江戸時代である。徒弟制度が成立し、技能の伝承と高度な技術の発達に大いに貢献できた制度であった。そしてそれは幕藩体制の下での手工芸生産の担い手である人材を供給し、中でも文化文政期には商品経済を発展させ、各地で地場産業も盛んにさせる原動力となった。しかし一方で、幕府財政が苦しくなり社会は混乱の様相を深め、農村では貧富の差が拡大し、打ちこわしや一揆が続発していった。そして明治維新とこれまでの日本には予測もできない勢いで、産業構造の変化という大きな波が押し寄せ、それによる人々の生活様式は一変した。その後も太平洋戦争、戦後の石油ショック、バブルの崩壊等日本の歴史は激動の時代であったと言えよう。

このような中で資本主義的生産による企業の設立は、時代と共にその規模はますます巨大化し、作れば売れるという大量生産による安価な商品を生み出していった。当然ながら手仕事による商品を圧迫させ、そして個人の職人としての経営規模は零細化せざるを得ない状況になっていった。特に職人の生活は戦後ガタンと落ち込んだことを遠藤氏は指摘している。更に欧米化した衣生活での着物から洋服への変化、また天然素材から化学繊維や化学染料の進出は、紺屋にとっては紺屋の存在そのものをも脅かすものであった。

『正雪紺屋』吉岡家の先代は、北海道に鉄道が伸びるたびに仕事が増えたと、時代にあやかって後世に残る功績を残された。しかし片や千葉家の住む栗駒高原一帯の人々のように、鉄道が伸びてきたがために日用品や日常衣類などが手軽に入手でき、これまで自給自足で賄われてきた藍染めが、消えていってしまったという現実もあった。

芹沢銈介が出入りされていた塩澤家も、その大きな時代の流れのあおりを受けた紺屋であり、トロール漁業で栄華を極めていた若松家も、大漁旗の注文は一気に無くなり大変なご苦労があった。また染職人斉藤博司氏もご主人から「年だからもうこれ以上給料は上げられない。」と言われ職を辞したのは、昭和59年48歳の時である。本人は勿論の事、そう言わざるを得なかったご主人も恐らく苦境に立たされた時代であったのかもしれない。

岩手県の千葉まつえ様の家でも、デパートからの仕事はもうほとんどなく、「1年に1反の仕事ではとても生活はできないですよね。」という言葉も象徴的である。

このような激しい社会の動きに、徒弟制度はとうに崩壊し、紺屋・職人は生活の目途をつけることが極めて難しい環境下におかれるようになった。しかし職人は、歴史的にも元来時代の流れに臨機応変に立ち向かうことより、むしろ頑固なまでに自分の仕事を貫き、その仕事そのものに生きがいを感じている気質があるように思える。林部敬吉はその書『伝統工芸の技の伝承』で“職人気質とは、自分の技は誰よりもすごいと自信を持ち、仕事に関しては妥協することを許さず、お金の為というより納得できる仕事だけをするような気質を言う。”[3]と述べている。若松旗店の奥様も“家（うち）は、お金はなくても心は錦なのです”と笑顔

で話された言葉はいつまでも心に残る。 しかし忍耐にも限界がある。紺屋が今後持続的に成長していくためには、その苦境に自らを変革していく努力、そしてこの時代の変化に対応するたくましい力をつけていかない限り、永続は難しいのかもしてない。

② 原材料・道具類の入手が困難になったこと

『地細工紺屋』若松家では、神社の幟を代々引き継ぎ染めてきているが、この幟に用いる70 ㎝•90 ㎝幅の布地が、昔のように質の良いものなかなか手に入りにくくなったと嘆かれる。

30 年 50 年と使われる神社の幕や幟に用いられる布地の質は悪くなる一方で、特に天然繊維の糸の質が悪く、漂白することによってその塩素が更に糸を痩せさせることになり、昔のような質の良い染めになりにくい状況になっているという。

また残念なことに、日本の建築物にとって恰好のサイズであった 45 ㎝幅の布がすでに無くなってしまった。この 45cm 幅の布地は、45 ㎝× 2 で半間、45 ㎝× 4 で 1 間と、日本建築にふさわしい、両端に耳のついた暖簾が作れるサイズである。この布地は業界では“太紡（ふとぼう）”と呼び、字のごとく太い糸でざっくり織られ、手染めには欠かせない布地であったと言われる。しかしスクリーンプリントで暖簾が作られるようになってからは、この布地の需要もめっきり減り、織る糸そのものの質が落ちたばかりではなく、それを織る機械そのものも古くなり、業者側からすれば、需要の少ない布地のために新たな設備投資はできず、とうとう手に入らなくなってしまったようだ。しかし 35 ㎝幅の耳が美しく整った“太紡”は、手ぬぐい用に現在も健在である。

更に染料も、最近は染料の国内生産ができなくなり、中国からの輸入に頼らざるを得ない。必要な量だけを小口で買うことが出来ず、大きな梱包すなわち樽ごと購入しなければならない。余分に手に入れても染料が“カゼ”をひき、美しい色にならないという。染料の色そのものも日本の物とは違ってあまりよくないと感じているようで、昔のように良い作品ができにくくなっていると嘆かれる。

千葉家では、自給自足の藍染を引き継いできてはいるものの、地元での炭の調達がままならない状況になってきている。何とか山形県からの調達はできたものの、素材の楢の木が手に入りにくいこと、焼く窯も地震で壊れ、自給自足での手段も限界にきている。

このように伝統的な手仕事を進めている人たちは、今日において原材料の調達が非常にできにくい状況にあり、また用具等もそれを作る人さえいなくなってきているという厳しいその中を、何とかかいくぐりながら、生きながらえているという状況が見える。

③ 技術習得の在り方

徒弟制度がとうになくなったという中で、今回の聞き取りの中では『正雪紺屋』の吉岡氏のみがそれに近い形での技術習得であったが、全員に共通して言えることは、其々がそれぞれの立場において、“親方から特にこれといった技術は何も教えられたことはなかった”ということである。親方のやることを見て、真似して、盗んで習得し、その中で自分の技術に磨きをかけ、「勘」が生まれるまで努力されていた。場数を踏むことによって生まれる「勘」をつかんでこそ、“一人前の職人であることの自覚”が生まれてきていることがよく理解できる。

一方現在の学校教育制度の中では、目的を達成するために願う技能・技術のカリキュラム

が組まれ、限られた時間の中で効率よく一定基準に至る講義や技術を学び、それを修めることによって、その個人の能力に関らず資格を取得し、社会に一歩を踏み出していくことと、大きな違いがみられる。

筆者が若い頃、当時日展理事長の高田誠氏が若い人たちに一言として次のようなコメントを残された。“私が若い頃、友達が先生に『絵とは何か』と伺ったら、『辛抱じゃよ。』と言われた。いろんな難関はあると思うけれども、絵というものは長い道のりなんだという事を考えて、『一途に続けていくこと』が一番最高の事のように思うんです。……”と。

いずれにせよ、職人の技術習得には図り知れない修練が必要となる。高田氏の言葉は、正にこれからの職人達にも相通ずるものがあるように思える。確かな技術を習得するためには、常に前を向いて現実に向かいながら、“続ける”ことの意識をもって精進することがまずは何よりも大切なことなのではないかと改めて感じる。

しかしそれには、まず“どうしてもこれをやりたい”と思える情動があるかないかにもよってくる。そしてまた“なんとしてもこの師に学びたい”という師に巡り合えるかどうかにもよってくるのだろう。職人が止めていく理由に、師との相性も一つの要因のように思える。

職人の技術習得は、外からでは窺い知ることができない容易なものではない事だけは事実なのだ。

④　職人・後継者になることへの敬遠

斉藤氏も職人になることに特に何の抵抗もなくその道に入ったように、今回取材させていただいた多くの人は運命的な自然の成り行きで職人になり、家業に就かれた方がほとんどで、若松氏においては、その上に自分がやらねばという強い覚悟を持っての継ぎ方であった。

しかし斉藤氏が紺屋に就職して半年で型をつけたら、「3年～5年早い」と指摘されたり、前項③で述べたように「勘」をつかんで1人前になるのには相当な時間がかかる職人である。まして親方の家に住み込み、生活を共にしながら技を覚え磨いていくというこれまでの徒弟制度スタイルは、現在の世界では、もはや成り立たない。

また塩澤家がそうであったように、大量の注文主である問屋の支配下にはいり、職人が次第に自宅から通いながら仕事をやるということになると、一人前になるための技術習得や、ましてや独立できるまでの力を蓄えるということには、相当な忍耐や根性が必要となる。しかも時代の流れの中で、問屋の都合で生活を脅かされるようになってしまっては、とうてい家業を続けることや、また職人になることを敬遠されても致し方ない。

サラリーマンになるよう背中を押してくれた三代目紺虎の奥様も、これからの時代を見据えて、四代目としての家業を継がせることより、将来の息子の行く末を案じての言葉であったのかもしれない。

職業の選択が自由になった今日において、吉岡氏のように、「後を継げ」と言えないことのもどかしさも事実なのである。

「静岡市洗染業協同組合」は昭和35年市内の印物業者と悉皆業者の合同で、組合員数50名で発足された。しかし平成2年創立30周年の時は半数の25名に、そして平成22年創立50周年の時には、組合員10名となり、とうとう平成25年にこの静岡市洗染業協同組合は解散の運びとなった。しかしその後すぐに新たに組合員8名を以って、大正4年「静岡染色組合」として発足した任意団体と同様の組合を立ち上げた。静岡市洗染業協同組合最後の理

事長を務められた櫻井茂雄氏（櫻井紺屋）は、今後後継者問題でここ数年のうちに、さらに半分近くになってしまうのではないかと嘆かれる。「現在の産業構造では“跡を継げ”と言えないのが現実です。」と吉岡氏と全く同じ言葉をもって話された。後継者の問題はもはや危機的状況である。

このような中にも八幡浜市の若松家では長男崇さんが、家庭教育の中で基礎となる技能や父親の無言の教えに導かれ、更には友人や地域の人達の精神的な支えもあって後継者として工房に立たれた。また栗駒市の千葉家でもまつえ様の姪が、今後後継者として期待がもてそうな状況になられていることに、心からエールを送りたい。

⑤　消費者の美意識の低下と供給者の意識

安いものが大量に出回っている昨今、全国的に生活用品の多くが100円で購入できる時代になった。静岡で生産される下駄がいい例であるように、日本の質の良い品をインターネット等で紹介しようものなら、すぐに外国製の模造品が安価で出回るようになってきた時代である。

消費者の我々が、安ければなんでもいい、その場が何とか過ごせれば、たとえそれが何であってもいい、というような安易な意識になってきてはいないだろうか。日本人として日本の伝統的な本物を見分ける美意識が、薄れてきてはいないかということの不安を感じている昨今である。

長く使い込むことにより使い手にとって使い心地が良く、しかも味わいが出てくるもの、それは、人の心に静かに寄り添ってくれるはずであり、生活の豊かさと精神的な豊かさをももたらしてくれるはずである。そのようなものは、決して大量生産から生み出されるものではなく、ひとつひとつに思いを込めた人たちによって生み出されたものなのである。

手作りの貴重な仕事を伝える職人も、その道具を作る職人も失いつつある今日。使い捨てでなく、長く自分の手に入れておきたいと願う私達消費者のささやかな“こころもち”が、日本の伝統を維持し、使い捨て社会を変えていくことにはならないだろうか。

そしてまた社会的に不安定な時代の今日である。いまこそ心の豊かさとゆとりをもたらす、質の高い伝統的な日本の手作り品を見直すことが必要な時代なのではないだろうかと考える。

今はお客の希望を聞き、どのような目的で・どのような物を・いつまでに・予算は・といった内容を聞き出し、それによってお客さんが満足される品物を提供しているという吉岡氏。またお客さんに喜んでいただける製品を、そして100年200年先にまで残る染めにと邁進されている若松旗店。このような供給者の姿勢があってこそ、消費者もまた心を動かされるのである。

職人の言葉に“目利き”ということばがある。それは製品の全体的な美しさ、線の曲がり具合、深さ、太さなど親方の作品との違いが判るようになることだと林部敬吉氏は述べている[4)]。このような能力を、職人は親方と仕事をしながら獲得していっているのである。 私達は消費者の立場でまた“目利き”になれるような美意識を持ちたいものである。

4．おわりに

今回の取材を終えて、取材に応じて下さった方々は筆者とほぼ同時代を歩いてきた人達である。時代の流れの中で、それぞれの理由で辞した人、それでもなお果敢に生きていこうとされる人達であった。予想はしていたものの、実態は極めて厳しく先の見えにくい状況であった。

一言“時代が変わってしまった”と言えばそれまでであるが、それではいったいこれから職人が生きていくにはどうしたらよいのだろうか。

静岡市では、昭和４１年度から静岡市伝統工芸技術保存講習会を実施している。平成25年度からはこの講習会が静岡産業振興協会の事業として継続実施中であるが、現在開設されている15部門の中で、漆器・摺り漆・蒔絵・木工指物・駿河竹千筋細工の5部門にしか受講者はなく、駿河和染部門においては平成元年からは受講されている人は1名もいない[5]。また静岡市では平成11年に静岡市伝統産業技術伝承事業を立ち上げたのを受け、平成13年度からは静岡市クラフトマンサポート事業として後継者育成の技術の伝承に努めている。これは伝統工芸の職人を志す人の指導をする親方に対して、最長2年間その指導に対して助成するという全国的にもユニークな取り組みである。しかし染色関係でその指導者として登録されている望月良氏（静岡市伝統技術保持者、昭和5年生）にお話を伺うと、「お話を受けて10年余りになりますが、これまでに私の所を訪ねてきた人は一人もいません。寂しい限りですよ。」と話される。平成21年度から平成25年度においてこの事業を通して自立されたのは家具関係で3名（男性）、下駄関係で1名（女性）だけという実態である。染色に関る事業は、この他一般者を対象とした駿府匠宿での体験教室があるが、静岡市経済局商工部地域産業課主査の竹田英世氏は「指導者と学ぶ人の相性、本人のやる気、そしてその仕事の将来性を考えるとなかなか難しいですね。ましてや染色関係は水や干し場としてのそれなりの用地が必要になりますからね。」と言われる。まさに静岡市における伝統的な紺屋の存続は、かなりむずかしい状況にあると言えよう。

しかし現在、静岡市地域産業課の提案で、伝統工芸の後継者育成を目的に20年前に編成された「するがクリエイティブ」がある。

伝統工芸における異業種の相互刺激によって静岡の和の技術を深めようと次代を担う若手16名のグループである。現在の代表吉永卓裕（吉永畳店）氏によれば染色関係者は4名。家業を継ぎつつ作家活動をされている方3名と作家活動をされている1名である。この若手染色家の人達によって、静岡の確かな伝統的染色が、今を生きる人達と共に未来に向かって引き継がれることを願ってやまない。

一方、栗原市では千葉まつえ様の応援部隊が立ち上がった。元東北福祉大学教授濱田淑子様他くりはらツーリズムネットワークの皆様である。地域の価値を普遍化し、市民が精神的・文化的・経済的に充足した暮らしを営んでいくことを目的とし、千葉家が今日まで繋いできた正藍冷染の製品販売と藍の刈り取り等の労力的二面からの協力支援である。

このような地域全体で地域に残る貴重な文化遺産を、何とか後世に残していきたいと立ち上がった人達がいることに、心より敬意を表すると共に、何とかこの支援が永遠であることを祈るばかりである。

長いこと気にかかっていたテーマであった。お話しにくい内容もあったにちがいないと思

われる中で、皆様の真摯なご協力に心から厚く御礼申しあげます。

注

- 注 1　山田京子編『人間国宝 42』朝日新聞社 2007P18
- 注 2　遠藤元男著『近世職人の世界』P370　4 行
- 注 3　林部敬吉・雨宮正彦編『伝統工芸の『わざ』の伝承』酒井書店 2008 年 P136
- 注 4　林部敬吉・雨宮正彦編『伝統工芸の『わざ』の伝承』酒井書店 2008 年 P130
- 注 5　静岡市経済局商工部地域産業課作成資料

参考文献

- 遠藤元男著『日本職人史の研究』（全 6 冊）雄山閣 昭和 60 年
- 町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』岩波書店 1962 年
- 寺田伝一郎著『雪国小記』東京村山書店 1960 年
- 林部敬吉・雨宮正彦編『伝統工芸『わざ』の伝承』酒井書店 2008 年
- 『由比町史』〔由比町教育委員会〕平成元年
- 山田京子編『人間国宝 42』朝日新聞社 2007
- 中田四朗編書『伊勢型紙の歴史』〈伊勢型紙の歴史刊行会〉1970 年
- 稲葉昌代「芹沢銈介の研究」『常葉学園短期大学紀要第 26 号』1995 年
- 稲葉昌代「殿様紺屋・新間家の型紙」『常葉学園短期大学紀要第 28 号』1997 年
- 稲葉昌代編『水窪の型紙』〈水窪町教育委員会〉平成 12 年
- 稲葉昌代「江戸時代から続く四国・若松旗店染色工程の研究」
『常葉学園短期大学紀要第 41 号』2010 年